フィリピン映画、理想と現実が映し出す世相

知花 いづみ

●映画～庶民の貴重な娯楽

フィリピン人にとって、映画は貴重な娯楽のひとつである。マニラ首都圏には数多くの映画館があり、ハリウッド産、国産を問わずシーズンを通して新作映画が公開される。週末はショッピングモールで買い物や食事をし、映画を見て楽しいひとときを過ごす人々の姿がよく見られる。ハリウッドの新作映画は日本に先駆けて公開される。これは字幕への転換に手間を取られない分、公開時期に時差が生じないことによる。料金も日本円で五〇〇円程度と比較的手軽に楽しめる設定だ。人気のあるジャンルはアニメ、恋愛、家族もの、アクション、コメディなど多岐に渡るが、なかにはナショナリズム、歴史、宗教、少数派の人権保護といった社会性の高いテーマを扱う作品も少なくない。

●根強い「スター文化」

映画人気を支えているもののひとつに「スター文化」がある。それはかつて昭和の日本人が銀幕のスターに対して抱いていた憧憬に似ていて、観客は自分の夢や希望を投影してファンタジーの世界を楽しむという点でも共通している。映画ファンに根強い人気を誇るのは、ヘラルド・アンダーソン氏に代表されるAmBoy（American Boyの略）と称されるかつての統治者を彷彿とさせる俳優達である。キャスティングは興行成績の明暗を大きく左右するため、制作会社はより集客力の高い俳優の登用に専心する。ひとたび作品がヒットすれば、カップリングされた俳優陣はシリーズ化された作品に出演し続ける。こうした往年の映画俳優に、フェルナンド・ポーJr.氏やビルマ・サントス氏などがいる。層の厚い支持を集めた彼らは、時代のアイコンとして、新しい文化やライフスタイルを提示する役割を果たしてきた。

●映画スターから政治家へ

フィリピンでは芸能界で成功を収めたスター達が、高い知名度を活かして政界に転身するケースが少なくない。この傾向はジョセフ・エストラダ元大統領、リト・ラピド上院議員、ビルマ・サントス・バタンガス州知事などの存在感の大きさにも現れている。とくにエストラダ氏やラピド氏は、ワーキング・クラスのヒーロー役を演じる機会が多かった。このため、貧困層の人々を伝統的な支配階級による圧政から救い出し、屈従から解放する庶民の味方というイメージが強く、これが後の政界進出の後押しとなった。選挙活動に多額の資金を投入せずとも予め全国区で顔が知られているという強みは、政治家を直接投票で選出する政治制度の下では簡便な集票システムの代替となるのである。

●世相を反映する国産映画

明朗な国民性のイメージがあるためか、フィリピンではエンターテイメント性の高い映画が主流なのかと尋ねられることがたびたびある。しかし、実際には各時代の世相を丁寧に映し出した社会性の高い佳作も多い。

(1) 一九七〇年代の作品

フェルディナンド・マルコス元大統領が政治家として台頭し始めた一九七〇年代の作品には、マニラ市内の貧困地区に住む母子家庭の軋轢に焦点を当てた“INSIANG”（一九七六年）、アメリカ支配の継続性に疑問を抱いた女性団体が現状を打破しようと社会運動を立ち上げる背景を描いた“MINSA, YISANG GAMU-GAMO”（一九七六年）、メイドなどインフォーマルセクターに属する労働者の権利を扱った“ATSAY”（一九七八年）などが公開された。

マニラ首都圏内のシネマ・コンプレックス（撮影：フォト・ジャーナリスト　村山幸親氏）

(2)一九八〇年代の作品

マルコス政権の戒厳令下のこの時期は、社会的基本単位としての家族的価値を主題とした“AGUILA”（一九八〇年）、当時の社会でフラタニティが果たした役割を描いた“BATCH ’81”（一九八二年）、アメリカに出稼ぎに行ったフィリピン人看護婦を主役に国外に流出せざるを得ない人々の悲哀を描いた“MERIKA”（一九八四年）などが公開されている。一九八七年に再民主化が図られた後は、エドサ革命の一連の動きをドキュメンタリー形式で撮影した“REVOLUTIONS HAPPEN LIKE REFRAINS IN A SONG”（一九八七年）や、戒厳令解除後の社会を宗教的見地から観察し、当時の社会的葛藤をあぶり出すことを試みた“ORAPRONOBIS”（一九八九年）が制作された。また、在比米軍基地の存在によって引き起こされた社会問題を取りあげ、反対派が基地撤退のために一致団結する様子を描いた“SA KUKO NG AGILA”（一九八九年）なども代表作となっている。

(3)一九九〇年代の作品

再民主化の旗手となったコラソン・アキノ元大統領から、積極的な自由化政策を主軸に経済発展を図ったフィデル・ラモス元大統領に政権が移行した一九九〇年代は、アンドレス・ボニファシオ氏とエミリオ・アギナルド氏という歴史的英雄の軍人二名を主役に据えた“BAYANI”（一九九二年）、植民地化を主題にアメリカ統治期の比米関係を扱った“BONTOC EULOGY”（一九九五年）、米軍が駐在したオロンガポ市に住む女性達の暮らしぶりを通して比米間系を再考証した“CONTINUINGLIVES: WOMEN OF THE BASES”（一九九六年）など、歴史物を扱う映画が公開された。

(4)二〇〇〇年代の作品

二〇〇〇年代は、違法賭博疑惑を契機に退陣に追い込まれたエストラダ政権の後を継ぎ、グロリア・マカパガル・アロヨ氏が政権の座に衝いていた時期である。この頃は、ミンダナオ地方のイスラーム教徒が直面している紛争問題の実態に迫った“BAGONG BUWAN”（二〇〇一年）、反政府勢力を押さえ込むための軍事化が地方の住民に与える影響を扱った“RED SAGA”（二〇〇四年）など、人々の個人的な暮らしに焦点を当てた作品が公開された。また、この時期のヒット作には、貧困および教育の欠如ゆえに犯罪に手を染めざるを得なかった一〇代前半の子ども達が、収監された刑務所で成人の囚人達とどのように共存していくかといった社会問題を取りあげた“BUNSO”（二〇〇四年）がある。二〇〇〇年代は、貧困削減と経済発展を目指しながらも、住民の暮らしにおいて実際に生活向上の実感を得ることが難しい現状に着目した作品が目立った。

●時代を超える教科書として

筆者が観たフィリピン映画のなかで近年とくに印象深かった作品に、二〇一〇年に公開された“DONOR”がある。マニラのキアポ地区を舞台とする本作は、貧しさゆえに臓器売買を決意する主人公が、移植を合法化するために臓器移植を希望するアラブ人との偽装結婚を選択するという内容である。いつもの景色のなかで暮らす人達が生活の糧を得るためにくだすひとつひとつの決断が、当事者の大きな身体的犠牲をともなうものである点が印象的な物語である。貧困のなかで生き延びようとする登場人物の思考回路に、先進国の物差しにはない発想がちりばめられている点について、改めて考えさせられた一作である。時間にも可動範囲にも体力にも限界があるなかで、時代を超えてフィリピン人の暮らしぶりや精神性を知ることができる映画は、エンターテイメントというジャンルを超えて様々なことを教えてくれるツールのひとつで、フィリピンを丸ごと理解しようとする試みの一助となっている。

（ちばな　いづみ／アジア経済研究所　新領域研究センター）